ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「……は？」

　それから二日後。学校から帰ってきた俺は、珍しく先に帰ってきていたレイから話を聞かされて素っ頓狂な声を上げていた。ちなみに詠はまだ学校から帰ってきていない。

　曰く、また任務だそうだ。

「ちょっとおかしくないかな？　今月、これで三回目だよ……？」

　近くで聞いていた樹葉がそう愚痴って渋面を作る。俺も同感だった。

『ワルキューレ』では、俺達みたいに学生は、あまり任務に出さないことになっている。原則ひと月に一回。あくまでも学生の本分を優先させて欲しいが故だ。

　にも関わらず、俺達はこれで三回目。お姉様の役に立てるのは嬉しいのだが、『ワルキューレ』の方針に背くようで、少し複雑だ。

「あー……それなんだけどね、上の方々曰く、出撃できるのが私らしかいないからっぽいよ？」

「なんだと？　どういうことだ？」

「いや、詳しいことは、後でメールで伝えてくるらしいんだけどね」

『ワルキューレ』は大所帯の『チーム』だ。俺の知っている限り、うちより人数の多い『チーム』など二つしか無い。しかもどちらとも交流はなく、当然ながら交戦する機会もそうは無いだろう。お姉様ですら、年に一回、大所帯の『チーム』のトップが集まる会談の時に言葉を交わすくらいしか交流がないと言っていた。極希に、物資の運搬だとかの際に、偶然そいつらが戦っていて、それに巻き込まれることがある程度だ。『トラース』内で占領している領土が、ほとんど真逆に近いから故である。

　過去の戦争の歴史を紐解くに、戦いというのは数の多い方に有利に運ぶ傾向がある。うちはあまり積極的に他の『チーム』を攻める方ではなく、どちらかといえば防衛に力を入れている。だから余程の事がない限り、何かあった際に誰を出撃させるか、という事になった時、うちはほぼ全員から選ぶことが可能なのだ。

　だから何が言いたいのかというと、つまり、さっきレイが言っていたような「出撃できるメンバーが自分達しかいない」なんて事態に陥ることはほぼないのである。

「何かあったのか？　明らかに異常事態だろう？」

「あ、今メールが来たよ？」

　樹葉の言葉で、俺達は樹葉の手に握られている『ＩＣＣＴ』の画面を覗き込む。

　書かれている内容を要約すると、こうだ。

　どうやら、結構な数の『チーム』が、『ワルキューレ』の拠点を襲撃しているらしい。その防衛で、『ワルキューレ』の他のメンバーは掛かりきりなのだとか。そしてそんな中、トラブレから会談の提案があった、という。相互不可侵条約を持ちかけられたそうだ。つまり、互いが互いに攻め込んだりしない、ということである。とは言っても、『ワルキューレ』がトラブレに攻め込んだことなど一度も無いので、実質、この提案の恩恵を受けられるのはこちらだけだ。

　何故突然向こうからこんな提案を持ちかけられたのかは謎だが、多分、前回攻め込んできた際、マルクスさん達が防衛に回ってきたせいかもしれない。こっちの実力を知って、敵に回すより『戦わない』という方向に持っていくのが、トラブレにとって最も安全だと判断したのだろう。

　とは言え、こちらにメリットがありすぎて、逆に不気味だ。

　まあ、その不気味さはともかく、まさか会談にお姉様と木藤さんだけ行かせる訳にはいかない。あまりに危険すぎるからだ。

　だが、通常なら他の人が護衛としてお姉様について行くのだが、さっきあった通り、『ワルキューレ』のほとんどのメンバーは他の場所の防衛で手が離せない。

そういう訳で、今月三回目になるが、お姉様の護衛として、レイ、樹葉、詠が『トラース』に行くことになったそうだ。

「……え？」

「……んー？」

　樹葉とレイの声がハモる。いや、今はそんなことはどうでもいい。それよりも、

「…………」

　あれ？　俺は？